

博士学位論文

院内学級における美術教育実践の現象学的研究

―病気や障害と向き合う子どもたちの美術制作をめぐる探究に並走して

長岡造形大学大学院 造形研究科 博士（後期）課程 216001

南雲 まき

要旨

本論文は、絵画と版画制作を行うアーティストであり、美術教育の実践者であり、研究者である立場から自身が勤務した院内学級における美術教育実践を省察し、院内学級で学ぶ病気や障害の重い子どもたちの美術制作の内実を見取るとともに、そこから人間にとって美術制作がどのような営みであるのかを明らかにしようとするものである。

一般的に障害児者による美術表現はアール・ブリュットやアウトサイダー・アートなどとして、ファインアートと呼ばれる美術とは異なるものとして理解されることが多い。しかし、本論文では、病気や障害をもつ子どもの美術表現をアール・ブリュットやアウトサイダーアートではなく、ファインアートという概念が生まれる以前からの美術の歴史に連なるものとして理解していった。

本論文の理論的前提となる先行研究としては Arts-Based-Research (ABR) と呼ばれる、芸術に依拠した研究という考え方がある。本論文の執筆を進める私自身の制作経験や他のアーティストによる研究を参照しながら、重い病気や障害をもつ子どもたちの美術制作をアーティストによる美術制作と本質的には同様のものとして読み解いていった。

また、インターセクショナルリティ、矢野智司による「二重メディア身体」論という概念によって障害に起因するものばかりではない子どもたちが生きる複雑な現実や、他者が介在する美術制作の在り様を捉えようとした。

研究手法としては、現象学の手法を用いた。メルロ＝ポンティによる身体論的現象学を採用し、子どもたちの美術制作、また、そこに関わる教員の身体との関わり、また、身体と物質との関わりのなかで何が起こっているのかに注目をした。また、フッサールによる現象学の手法を採用し、私自身がこれまでに身につけてきたものの見方、考え方を括弧に入れ、臆見を外し、事象そのものに迫ることで何が見えるのかについて注目をした。

院内学級の子どもたちの美術制作については、筋ジストロフィーの子どもたち、筋疾患の総称としてのミオパチーの子どもたち、脳性まひによる、重症心身障害児と呼ばれる知的にも身体的にも重度の障害をもつ子どもたち、入院が一年以内の短期入院の子どもたちに注

目をし、それぞれの固有の身体と素材や画材等の間からどのような表現が導き出されているのかについて述べた。

例えば、筋ジストロフィーの子どもたちは筋力が弱く、身体の可動域も小さい。一般的にはそれらの特性は美術制作を行ううえで不利になるものと考えられるが、例えば、筋力が弱いために鉛筆で描くことが難しい場合、描くのに筋力を要さず、少しの力で線の強弱をつけることが出来る筆ペンを用いて描くなど、子どもたちは筋力の弱さや可動域の小ささを画材の選択によって補っていた。また、消して描き直すことの出来ない画材を用いることは、子どもたちが描きたい形を選び取り、慎重に描くことにもつながっていた。そして子どもたちは自分が行いたいと考える制作方法を自ら選び取り、どうすれば自身の身体をもって、その制作方法で表現を行うことが出来るかを試行錯誤するなかで、新たな表現方法を編み出していった。

また、自身では手を動かすことが出来ず、口頭での指示による教員の介助を受けて美術制作を行うミオパチーの子どもは、画材や素材の性質と、介助をする教員の知識や技能などを自らの美術制作の重要な要素として、その条件のなかでどのようにすれば美術制作を成立させることが出来るかという探究の上に、自らの制作方法を見出していった。

そしてそれらの子どもたちは、ただ作品を作り出すことに留まらず、絵を描くという行為を通して、描くために何を見るか、どこへ行くかなどを考え、病院のなかで完結していた生活を変容させていった。病気や障害をもつ子どもたちの美術制作は、それぞれの身体の固有の特性や、それぞれの子どもがそれまでに何を経験し、どのように思考し、その先をどのように生きていこうとするかと密接に関わっていた。

本論文の副題である「病気や障害をもつ子どもたちの生と美術制作における探究」は、そのような、子どもたち一人一人の生と分かち難い美術制作における探究を表している。ここで言う生は、ただ身体が生存しているということではなく、外界や人類の歴史と接続しながらどのように豊かな生を生きるかということである。

本論文は、多様な病気や障害をもつ子どもたちの、それぞれに固有の身体と外界との関わりのなかで起きていることをひとつひとつ見取ることによって、どのような人間の美術制作においても生起しているはずの人間の生成変容について理解するものである。そしてそこに関わった教員の立場から、子どもたちの制作のただなかにおいて、自身がどのように変容していったかについても述べていくことによって、子どもと教員が生成変容を繰り返す美術教育の姿を明らかにした。